

百日咳について

ポイント

- 百日咳菌による気道（のど～気管支）の感染症です。
- 咳が出始めてから早いうちに、適切な抗菌薬を飲まないと、1ヶ月以上咳が続きます。
- 新生児～乳児（生後0～6ヶ月程度）が感染すると、命にかかわるほど重症化します。
気管支喘息の体質を持つ方が百日咳にかかると、よりひどい咳症状となります。

< 百日咳菌について >

- 百日咳菌が乳幼児に感染すると、息が吸えないようなひどい咳が続きます。そのため、0歳児は百日咳ワクチンが含まれている3種混合（現在は5種混合）でワクチンを打ちます。
- ワクチンで体に百日咳菌に対する抗体が作られると、百日咳菌に感染しにくくなります。最近では、1歳前後に打ったワクチンの効果がきれる7歳～14歳くらいの小児に多く発病します。

< 百日咳という感染症について >

- 百日咳菌はヒトからヒトへ咳を介してうつります。感染力は比較的強く、抗体を持っていない人はすぐ感染します。通常7～10日程度の潜伏期のあと、普通のかぜ症状で始まり、次第に咳の回数が増え、程度も激しくなります。
- 発症1～2週間には、乳幼児は発作的なけいれん性の咳となり、連続する咳 → 息を吸う時にヒューというような音が出る声があります。小学生や成人ではそのような特徴的な咳よりは、夜の咳、会話すると出る咳、という喘息のような咳症状が、数週間～1ヶ月以上続きます。
- また、元々気管支喘息の体質のある方が百日咳にかかると、感染により喘息発作の咳も誘発されるため、ダブルパンチでかなりひどい咳となります。

< 診断 >

- 小学生以降は症状だけで診断は困難です。インフルエンザのようなすぐ結果の出る抗原検査キットは感度が悪いため、当院ではPCRのような百日咳ランプ法を用いて検査します。
- 発病から10日以上経っている方は、血中抗体価を測定します。
- 学生さんは、百日咳と診断されると＜抗菌薬内服を開始後5日間＞又は、＜特有の咳がおさまるまで＞出席停止です。当院では疑わしい方は早期に治療を開始しますので、陽性と判明した時点には既に出席可能となっていることが多いです。



< 治療 >

- 百日咳では、発病早期、すなわち「咳が出てから5日以内」程度で、マクロライド系の抗生物質（クラリス、ジスロマック）を内服することが重要です。発病後3週間くらいまででも、ある程度の効果はありますが、この時になってしまうと咳は続きます。
- 令和7年から、これらの薬が効かない＜耐性菌＞が問題になっています。治療開始後3日たっても症状が改善しない時は、早めに再診してください。
- 喘息を合併している方や、咳のひどい方では、ステロイド薬の内服や吸入が必要です。